

令和 8 年度 都市間交流(うるま市)報告書



うるま市議会 議場にて

令和8年4月20日(月)・21 日(火)

都市間交流概要

1 視察日程

令和8年4月20日(月)・21日(火)

2 視察行程

日にち	行程
1日目 4/20 月	・ うるマルシェ 視察 ・ 勝連城跡・あまわりパーク 視察 ・ うるま市役所(うるま市感動産業特区の取組について)うるま市議会との意見交換会 議場・委員会室見学
2日目 4/21 火	・ 浜比嘉島 見学 ・ 海中道路(あやはし館・海の文化資料館) 視察 ・ 石川歴史民俗資料館 視察 ・ 石川多目的ドーム 視察

3 目的及び視察先

(1) 文化資源を核とした観光・産業振興と交流施策の具体化

(視察先:うるマルシェ、あまわりパーク・勝連城跡、海中道路〔あやはし館・海の文化資料館〕、石川多目的ドーム、うるま市議会との意見交換会)

うるま市の多様な文化資源(世界遺産、地域産品、海洋・島しょ文化、伝統文化など)の保存・活用、観光・産業振興、地域経済活性化への取組について学ぶ。

この中で、特に具体的な施策として、文化資源の保存と活用、伝統文化の継承と情報発信、そして「感動産業特区」における文化芸術を核とした取組について掘り下げ、文京区の文化芸術振興、観光振興、地域活性化、交流事業の企画及び施策の質向上に資する知見を得る。

うるマルシェ

うるマルシェは、うるま市産品を始めとする農産品・各地域の特産品を購入できる場所として、また、市産品や食文化などをとおして、市の魅力発信に寄与している多機能・複合型施設です。

視察時は、地元の方はもちろん、観光客の方も含め、大勢のお客様で賑わっておりました。



うるマルシェ内の様子

勝連城跡・あまわりパーク

勝連城跡は、昭和47年(1972年)に国指定史跡に指定され、平成12年(2000年)に「琉球王国のグスク群および関連遺産群」の一つとして、首里城跡などとともにユネスコの世界遺産に登録された史跡です。

視察時は、文化財課の職員の方から、5つの曲輪(くるわ)ごとに想定される建造物や伝説などをご説明いただきました。

あまわりパークでは、勝連城の歴史や勝連城10代目城主である阿麻和利についての映像を大画面で拝見し、15世紀頃の勝連城に思いを馳せることができました。

また、当時の海外貿易の様子が分かりやすく展示されており、子どもから大人までの来訪者が興味を持てる展示内容となっていることを確認しました。

■ 勝連城跡



▲遺構保護(石垣がすり減らないように)、また、転倒防止のため、階段が設置されている。



主な質疑応答

(1) 世界遺産としての価値と、保存と活用のバランスをどう考えていますか。

A. 平成28年度に刊行した『史跡勝連城跡保存管理計画』に勝連城跡の本質的価値を整理し明確に示しています。保存に関しては、文化庁国庫補助事業を利用し発掘調査およびその調査成果を基にした復元整備工事を実施し、価値を保存するとともに新たな価値を追加する整備を実施しています。

活用については、趣旨が勝連城跡の本質的価値を失うものではあってはならず、実施する活用内容が本質的価値や勝連城跡の存在を高めるものについて、現状変更の許可をするようにしています。

全体をとおり、保存を第一に考え、活用については世界遺産勝連城跡が単なるイベント会場と化さないよう、活用内容を整理しています。

(2) 来訪者数や観光客の属性などの傾向を教えてください。

A. コロナが落ち着いてきた令和5年度から令和7年度にかけて、概ね年間11万人が来訪されました。

また、来訪者の属性ですが、令和6年度は県内21%県外66%海外13%となっています。

(3) 登城ルート of 安全対策やバリアフリーへの配慮はどのように行われていますか。

A. 登城にあたり、石階段や石畳道など、当時の遺構として残っている箇所については、遺構保護とともに転倒の危険性の除去を目的とし、階段を設置しています。

バリアフリーに関しては、歩行等に障害を持つ方は四の曲輪までは電動カートで入城できるようにしていますが、そこから上の三の曲輪以上は対応できておりません。十分なバ

リアフリーとはいえず、今後の課題と考えております。現在、整備が進行している東の曲輪については、歩行等に障害を持つ方が、東の曲輪から見ることで勝連城の姿や太平洋を観覧できるよう、別ルートからの入城口の整備を検討しています。

- (4) 勝連城跡周辺整備事業において、PFI 方式を採用した狙いと、今後の長期的な維持管理における財政課題についてのお考えを伺います。

A. 世界遺産「勝連城跡」を活用し、公園の整備も含めた大型観光拠点の整備事業との位置付けのもと、市の観光課題の解決(通過型観光からの脱却、宿泊施設の整備など)を図りながら長期間にわたって事業運営していくにあたり、高質な公共施設の整備と民間事業者のノウハウを活かした運営の両軸が求められたことからです。

また、長期的な維持管理における財政課題の解決に向けて、今回の事業では自由提案事業を求めています。民間のノウハウを存分に活用し勝連城跡の入場料と相乗効果を図り、質の高い維持管理につながるものと期待しています。さらに、プロフィットシェアを設定していることから、市からの指定管理料も結果、減額することが期待できます。

■ あまわりパーク



主な質疑応答

- (1) 展示・映像・ライブを組み合わせた体験型ミュージアムの狙いと、来館者の満足度や学習効果はどのように評価していますか。設定している KPI などを教えてください。

A. ライブパフォーマンスなどにて施設の核である現代版組踊「肝高の阿麻和利」を視覚的に触れることで、勝連城跡に登頂する前の期待感や没入感の効果を高めつつ、実際の演者である子供たちの活躍の場を創出する未来志向の人材育成も図っていくところを狙っています。

来館者の満足度などについては、ライブパフォーマンス観覧を主目的とする年間パスポートの販売部数実績から高く評価しています。勝連城跡公園の全面供用開始までには指定管理者と協議を行いながら KPI の設定について検討していくこととしています。

- (2) 阿麻和利の歴史的評価が分かれている中で、学術的知見と観光的ストーリーテリングの整合性をどのように図り、地元住民の誇りの醸成や学校教育における郷土学習等に生かされているのか、教えてください。

A. 琉球王国時代の歴史書や芸能(組踊「二童敵討」)において、阿麻和利は首里王府に刃向かった逆臣として位置付けられ、世間一般の見解としてもそのような認識が定着しておりましたが、学術的な研究の深化により海外交易を通して地域の発展に寄与し、民衆からも

讃えられていたことが明らかにされました。

本市では、学術上の研究成果を観光施策に反映させるとともに、地域の英雄として阿麻和利を位置付け、旧勝連町時代には現代版組踊「肝高の阿麻和利」を立ち上げ、また、学校教育において勝連城跡や阿麻和利をテーマにした探求学習に活かしております。

なお、あまわりパーク歴史文化施設では、歴史の面白さ(歴史を残す主体や立場によって評価が変わる)を伝えるべく、逆臣像と英雄像の両面を解説しております。

(3) 世界遺産周辺の環境配慮など設計上重視した点と、塩害・台風などの特有の環境条件に対する維持管理上の工夫を伺います。

A. 勝連城跡公園を含むあまわりパークでは環境配慮として景観地区の設定を行っており、建築物の最高高さを9m以下としています。塩害や台風などの維持管理上の工夫についてですが、あまわりパークに限らず台風前には公共施設や各家庭において、屋外の備品(看板やベンチ等)を固定するなどの飛散防止を行います。排水溝の清掃も行い冠水や溢水に備えます。

うるま市役所・市議会 意見交換会

テーマ:うるま市感動産業特区の取組について

感動産業特区とは..

ありのままのうるまの「地域資源」を「感動」という軸でつなぎ、自然や文化、特産品等を産業化する独自のまちづくり構想のことです。(視察時に頂いた資料より)

■ うるま市感動産業特区の取組

始めに、秘書広報課の職員の方から、2023年4月に宣言した全国初の感動産業特区について説明を伺った後、「人が輝き、地域のありのままだが、感動を生むまち」のコンセプト動画を視聴しました。

続いて、「まんまうるま」についての説明や、2023年8月に文京区で行ったシティプロモーションや著名人も一緒に「まんまうるま」を合言葉に発信されている動画なども視聴しました。

うるま市公式ファンクラブなどについての説明を受け、市を盛り上げ、うるま大好き人口を増やす施策の説明を受けました。

■ 意見交換

台風前後の対策や平和教育、うるま市の農産物、石川地域の陸上自衛隊訓練場計画における議会・自治会の取組についてなど、意見交換を行いました。



主な質疑応答

(1) 「感動産業」と従来の観光振興策との違いと、市の政策上の位置づけを伺います。

A. 従来の観光振興策に加え「感動産業特区」を宣言した令和5年度からは、うるま市の様々なコンテンツを「感動の軸」でつなぎ、うるまに触れる人々に感動を与えることを意識したブランディングを行っています。

各施策においても、「感動を軸にする」ことを意識したまちづくり推進という統一した考え方を持っています。

(2) 「まんまうるま」のブランド戦略を詳しく教えてください。

A. 海・世界遺産 勝連城跡・農水産物・自然・笑顔が似合う うるまんちゅの個性など、それぞれとても彩り豊かでカラフルなコンテンツは、すべて“飾らないありのままが一番の魅力”です。その“ありのままのうるま市の魅力”は、うるまに触れる人の心にじんわりと広がり、感動を与えます。飾ることなく、そのままが全て魅力になる、うるま市の一つ一つ、それらを親しみを込めて「まんまうるま」と名付けました。

「まんまうるま」を感動の源泉とし、感動産業特区を推進していきたいと考えております。

(3) 「感動」をどのように KPI として測定し、成果を評価していますか。

A. 最重要 KPI は R8～R12 までの5年間で「うるま大好き人口(より密な関係人口)100 万人を達成すること」です。

また、その実現のための取り組みとして「①人づくり ②地域コミュニティ ③認知拡大」の3つの軸を立てており、それぞれにて市民意識調査やWEB 調査等により効果測定・成果評価を行います。

(4) 発信・プロモーション戦略(市内浸透と県外 PR)の考え方と課題を教えてください。

A. 市内浸透▶

「市のイベントや発刊物等、目につくものにはロゴをつける」、「著名人を起用しながら、ビジョンや SNS など幅広いツールを用いた発信を強化」、「市内イベントにおいても常に PR する」等を意識しながら市内浸透を図ります。

また、動画等の制作にあたっては、日常の中にある、うるまのありのまま全てが魅力だということを知り、愛着・誇りをもっていただけるよう、「感動」に訴求していきます。

A. 県外 PR▶

県外イベント等においては行政のみならず、演者や事業者全員が一丸となって「感動産業特区うるま市」を PR します。単に PR するのではなく、出演情報やツアー日程等の具体的な情報を併せて発信し、しっかりと出口を作ることを意識します。

SNS においても、積極的に観光大使やアンバサダー等と共同投稿を行い、一体的に発信していきます。

課題

- ① 市内外から頂く“お褒めのコトバ”をしっかりと届け続けることが課題だと考えています。
- ② 「感動産業特区」を推進するにあたって、まずは中核となる「うるま市公式ファンクラブ『うるラバ』」の登録者数を増加させることが課題と考えています。

アマミチューの墓

浜比嘉島のアマミチューの墓を視察した。当日は、満ち潮のため、アマミチューの墓を直接見させていただくことはできませんでしたが、お墓の手前で文化財課の職員の方からお話を伺いました。

地域コミュニティと連携した管理や、伝統芸能の継承も地域の方が率先して連携していることなどを伺いました。公衆トイレも景観に配慮していることを確認しました。



主な質疑応答

(1) 年頭拝みなどの祭祀はどのように継承され、地域でどのように維持されていますか。

A. シルミチューで行われる年頭拝みが旧暦1月1日に開催され、三線・太鼓などで奏でられ、歌や踊りを地域住民の老若男女が奉納し、継承・維持されています。その後、12か所の拝み所(御嶽、カー＝湧き水、旧家)を巡拝します。そのひとつの場所がアマミチューです。

ただし、集落から県外などへ出て移り住む若者が安全祈願・昇進祈願などを含めてアマミチューを拝むこともあります。

(2) 観光客増加の中で、聖地としての尊厳やマナーをどう守っていらっしゃいますか。

A. 浜比嘉島のなかで比嘉集落は観光客の増加の傾向となっております。本市と市観光物産協会の発信や観光旅行会社などの発信によりパワースポットと知られている背景があります。尊厳とマナーは地域住民によるビギナーセンター的役割を整え、対面での接客により聖地の価値を伝え、その尊厳とマナーの啓発活動につながっております。

(3) 潮位や滑りやすさなどの安全対策と環境保全はどのようにされていますか。

A. 基本的には潮位が増す際は行き来できません。神聖な場所であり、かつ自然的な景観を持続させるため、利便性を図るインフラ整備は想定しておりません。

ただし、安全対策はアマミチューの管理者である自治会へ任せております。

海中道路[あやはし館・海の文化資料館]

海の文化資料館では、文化財課の職員の方から説明を伺いながら、視察させていただきました。造船技術の継承も考え、小学生がマーラン船に興味を持てるよう、船底に入ることができたり、舵を回せたりと、体験型の展示もあり、工夫されていたことを確認しました(市内の子どもたちが、授業で資料館を訪れることもあるとのことです。)

また、モズクについての展示もあり、普段から食べているモズクの種付けから育成・収穫まで、養殖の流れや加工品などが、分かりやすく紹介されていました。



主な質疑応答

(1) うるま市の無形民俗文化財であるマーラン船造船技術の担い手育成や技術継承に、この施設はどのように関わっていますか。

A. マーラン船と船大工、造船用具は本市の特色のある海洋文化に欠かせない文化の構成要素「海の邦としての活躍するまち」(『うるま市文化財保存活用地域計画』)として捉えており、文化財として指定しています。そのため、国庫補助などを活用し、次世代の造船技術の継承へ取り組んできました。

そして、造船技術や木造船の歴史文化を伝える場として、学校教育や生涯学習の機関と連携しております。

(2) 学校利用では、どのような学習プログラムで、子どもたちに海の文化を伝えていますか。

A. 学芸員と船大工の出前講座による小学校へ民具等を活用した体験学習、自然学習、観光を学ぶ社会学習があり、かつ親子を対象とした野外講座などを取り組み、海の歴史文化を伝えています。

(3) 地域住民や関係団体、漁業関係者、文化継承者とどのように連携していますか。

A. 資料を活用した教育普及活動の一環として当館の学芸員やスタッフが地域へ出向き、地域資源をもって教育資源や産業資源と関連づけるため、連携づくりを意識し、本市の人づくりに取り組んでいます。

石川多目的ドーム

うるま市は令和元年に「闘牛のまち宣言」をしており、うるま市の闘牛は、市の無形民俗文化財に指定されています。石川多目的ドームは、闘牛以外にも、地域の方がお祭りやイベントに使用されているそうです。



視察時は、闘牛実況アナウンサーの伊波 大志(いは た いし)さんから、闘牛の歴史や面白さを伝えていただきました。

うるま市では、昔から、牛の散歩が日常的に行われ、若い世代でも牛の世話をしているそうで、公務員やパン屋さん、歯医者さんなど、いろいろな職業の方が趣味で行っている場合もあるとのこと。

大画面で闘牛の試合を観戦し、闘牛のツノは一頭一頭違うことにより戦い方が違うなど、闘牛のおもしろさや見方を伊波さんの胸が高なる実況等で分かりやすく教えていただきました。



主な質疑応答

(1) 大会運営は、どのような体制で行われていますか。

A. 会運営につきましては、沖縄県全域に存在する闘牛組合を基盤として成り立っています。統括団体である一般社団法人沖縄県闘牛組合連合会のもと、南部から中部、北部、離島を含め現在18の組合が活動しており、年間を通して約25回の大会が開催されています。

各大会はそれぞれの地域組合が主催となり、対戦カード編成や広報、会場設営、当日の進行まで主体的に担いながら、連合会や自治体と連携し、地域一体となった体制で運営されています。



(2) 闘牛は無形民俗文化財とのことですが、どのように継承され、若い世代や新規の担い手は増えていきますか。

A. 闘牛文化の継承については、日常的な飼育や大会を通じて牛主や勢子の技術・知識が自然と受け継がれてきました。

全国的には担い手不足が課題とされる中で、沖縄では若い世代の参入は比較的增加傾向にあります。これは大会開催の頻度が高く、実際に闘牛に触れる機会が多いことに加え、SNS やメディアを活用した発信によって魅力が広く伝わっていることが要因と考えられます。

(3) 観光客、特に外国人観光客の増加に対して、どのような受入や発信の工夫を行っていますか。

A. 外国人観光客への対応については、大規模大会において日本語実況に加え英語アナウンスを導入し、会場全体の理解促進と一体感の醸成を図っています。

しかしながら、現状では十分とは言えず、今後は多言語パンフレットやポスターの制作、ルールや文化背景を分かりやすく伝えるコンテンツの充実など、受け入れ体制の強化に取り組む必要があると考えています。

(4) 闘牛に対する動物福祉の観点からの配慮はどのように行っていますか。

A. 動物福祉の観点においては、まず闘牛文化への正しい理解を広げることを重視しています。子どもたちとのふれあい体験や牛舎見学を通じて、牛がどのように育てられているか、飼い主との深い信頼関係や愛情を伝える取り組みを行っています。

また、テレビ番組などのドキュメント制作を通して、闘牛が単なる対決ではなく、動物の本能を尊重しながら人と牛の絆の中で成り立つ文化であることを発信しています。

大会時には獣医師を常駐させ、牛の怪我への迅速な対応ができる体制を整えるなど、安全管理にも最大限配慮しています。

(5) 牛を家族のように育てる文化は、現在どの程度残っていますか。闘牛が地域コミュニティ維持に果たしている役割は何ですか。

A. 牛を家族のように育てる文化は現在も色濃く残っています。

牛主の多くは日中仕事を持ちながら、日々の世話を欠かさず行い、飼料となる草も自ら確保するなど、多大な時間と労力をかけています。こうした営みは強い愛情と覚悟のもとに成り立っています。

また、飼育は個人だけでなく家族や仲間、地域のグループで支え合うことが多く、その中で自然と人と人とのつながりが生まれます。

さらに、地域対抗の要素も強く、各地域の誇りが大会に反映されることで、コミュニティの結束が高まり、維持・活性化に大きな役割を果たしています。

闘牛は単なる競技ではなく、「牛を育てる文化」であると同時に、「人と地域をつなぐ文化」として、現在もうるま市に根付いています。

(2) 平和教育の充実に資する知見の収集

(視察先: 石川歴史民俗資料館)

平和教育の重要性が増す中、文京区における平和教育の学習を充実させ、郷土史学習を通じた次世代育成を図るため、石川歴史民俗資料館における郷土史の収集・保存・展示方法、学習受入体制、学校教育との連携について学ぶ。これにより、文京区の今後の平和教育の充実に生かす知見を得る。

石川歴史民俗資料館

石川歴史民俗資料館は、戦前・戦後の生活を今に伝える歴史文化ミュージアムです。戦前の暮らしの生活用具の展示のほか、戦後の展示が充実しており、戦災で家を失った人々のための仮設住宅、パラシュートなどを利用して作られた服や沖縄県庁の前進である沖縄諮詢会についての展示など、規模は小さいながらもまとまっており、終戦後、市民が前を向いて力強く進んでいった様子が目に浮かぶように展示されていました。



文化財課の職員の方からのご説明のほか、地元市議やNPO法人石川・宮森630会の事務局長からも宮森小学校ジェット機墜落事故の当時の様子等について、お話を伺いました。





主な質疑応答

(1) 石川が戦後沖縄の出発点とされる意味と独自性、復興の過程をどのように体系化し、子どもたちに希望として伝えているか伺います。

A. 『うるま市文化財保存活用地域計画』の歴史文化の特徴である「戦後復興発祥のまち」としてミッションステートメントを設定し、資料の収集と保管、調査研究、教育普及活動を取り組み、地域の子供たちへ伝えております。

(2) 宮森ジェット機墜落事故など、戦後史の他の出来事との関連づけはどのように行っていますか。

A. ご質問の事故や出来事などは、関連団体と連携し、各年度にテーマをもって平和資料展を開催しております。

(3)カンカラ三線のような「文化の再生」は、どのようなメッセージとして伝えていますか。

A. 『うるま市文化財保存活用地域計画』の歴史文化の特徴である「歌と芸能を生み出すまち」として地域に残る無形文化財の伝統芸能や無形民俗文化財の民俗芸能、有形文化財の三線などを生かし、本市のまちづくりに活用しております(エイサーまつり、全島獅子舞フェスティバルなど)。



4 参加者

議長	市村 やすとし
議会運営委員会 委員長	名取 顕一
総務区民委員会 委員長	白石 英行
厚生委員会 委員長	のぐち けんたろう
建設委員会 委員長	松平 雄一郎
文教委員会 委員長	上田 ゆきこ

自治制度・地域振興調査

特別委員会 委員長	板倉 美千代
災害対策調査特別委員会 委員長	宮本 伸一

子ども・子育て支援調査

特別委員会 委員長 兼	
自由民主党文京区議会 幹事長	田中 としかね
日本共産党文京区議会議員団 幹事長	金子 てるよし
公明党文京区議団 幹事長	田中 香澄
政策チーム AGORA 幹事長	浅田 保雄
区民が主役の会 幹事長	依田 翼

随 行 佐久間 康一	(区議会事務局長)
随 行 秋山 克彦	(区議会事務局庶務係長)
随 行 下笠 由美子	(区議会事務局調整担当主査)

視察報告

令和8年度都市間交流「沖縄県うるま市」の視察を終えて

議長 市村 やすとし

令和8年4月20日、21日の一泊二日でうるま市議会との意見交換会を中心にうるマルシェ、あまわりパーク、勝連城跡、うるま市立海の文化資料館、石川歴史民俗資料館、闘牛場として利用される石川多目的ドーム等を視察し、うるま市の歴史と自然、平和教育の取組、文化資源を核とした観光・産業振興と交流施策の現状を現地確認し、調査してまいりました。

今回のうるま市訪問は令和6年に締結した友好都市協定の趣旨を踏まえ、より交流を進化させることを第一に実施したものであり、実りある視察になりました。

その中でも令和5年4月にうるま市は感動がまちの産業になるように「感動産業特区」宣言をし、自然と歴史、受け継がれてきた伝統文化、人の温かさや笑顔、こうした日常の景色の中にありのままの魅力があり、それこそが「感動」そのもので、全国に「まんまうるまブランド」を立ち上げその魅力発信に努めています。

特に、その中で「肝高の阿麻和利」の現代版組踊ですが、本番と練習風景も見させていただきましたが、中高生の真剣な取組と歴史を背負っている姿になぜか涙が止まらなかったことを思い出します。



うるま市議会 議場

本区としても練習の成果を発表できる場所の提供とともに、再び感動を共有できる日を楽しみにしたいと思います。そして、文京区の子供生徒たちがこのパフォーマンスを見て、歴史や文化を大切に、地域が支え合う心温まる、魅力溢れる文京区を感じて、行動をしてくれることを期待したいと思います。

最後にこの視察を計画していただいたうるま市議会、両事務局の皆様のご尽力に改めて感謝を申し上げます。

うるま市との都市間交流について

議会運営委員会 委員長 名取 顕一



盛岡市を縁としてつながったうるま市とは、令和6年10月13日に友好都市協定を結びました。そのうるま市をしっかりと知ろうと今回の訪問になりました。その趣旨を理解してくれた行程は、1泊2日でうるま市の魅力を確認するには、十分な内容でした。

特に世界遺産である勝連城跡は15世紀に中国始め、東南アジア、日本本土との海外貿易を行い、勝連城に繁栄をもたらした十代城主阿麻和利(あまわり)が居城したとして知られており、その伝説を地元の中高生が演じている現代版組踊「肝高の阿麻和利」は、文京シビックセンターでも上演されました。

こうしたうるま市の魅力、闘牛場として利用される石川多目的ドームや石川歴史民俗資料館、そして海中道路等をしっかりと見させていただき、沖縄の平和教育やその歴史に対して、少しは理解できたと思います。

その後のうるま市議会との意見交換会では、お互いに忌憚のない意見交換が出来ました。こうした地方都市との交流がその地方をより理解することになり、様々な相互協力が必要な時に迅速な対応が、可能になると確信しました。今後もしっかりと連携を取っていきたいと思います。

青少年育成と伝統文化

総務区民委員会 委員長 白石 英行

第49代議長就任中の2024年10月にうるま市と友好都市協定を結ぶ間、比嘉議長と行政間の課題について意見交換させていただき、協定後には文教委員会にて、文京区の生徒がお世話になっている平和学習状況について視察をし、今回、文京区議会とうるま市議会での進捗状況、友好都市としての魅力などを確認する意義多き訪問となりました。

意見交換で、2005年に具志川市、石川市、勝連町、与那城町が合併してからの行政運営や勝連城跡など文化遺跡などを活用した「感動産業特区うるま市宣言」により、シャイな生徒達の活躍の場「現代版組踊 肝高の阿麻和利」の設置などの成果として、人口減少が見られ



ない事などについて質疑させていただきました。

また、市内の文化資源の活用にアンバサダーを設置して、それぞれの魅力を強く発信すると共に、連携し運営されるよう市が中心となって前進している事に力強さを感じました。

うるま市を通じて沖縄に触れる事で、その歴史や自然環境変化など文京区と異なった部分には、次世代が未来を築き上げていく大切な事が多く含まれており、今後の友好事業を通じて、両市民の交流、両自治体の連携が発展することを期待しています。

うるま市との都市交流視察を終えて

厚生委員会 委員長 のぐち けんたろう

うるま市への行政視察を通じて、地域の特性を最大限に生かした持続可能なまちづくりの姿勢を強く実感した。

特に印象的だったのは、世界遺産である勝連城跡などの歴史遺産や伝統的な闘牛文化といった独自の地域資源の活用と、それを軸にした観光・産業振興の融合である。単なる観光地の整備にとどまらず、地域ブランディングや安定した雇用創出へと確実に繋げる仕組みづくりに、先進的な地方創生のモデルを見た。

さらに、現地では比嘉市議会議長および市議会議員の皆さんとの意見交換会に臨み、議会と行政が一体となった住民目線の施策展開や、複数の行政区が合併したうるま市の課題と成果について、大変貴重な生の声をお聞きすることができ、非常に密度の濃い有意義な時間となった。

また、勝連城跡のふもとにある歴史文化施設あまわりパークも視察した。出土品の展示に留まらず、映像や躍動感のある映像を駆使して、地域の歴史文化を楽しみながら深く学べる工夫が凝らされており、体験型観光と教育を掛け合わせた最先端の施設運営として、今後の自治体の施策へ還元できる大変示唆に富むものであった。



今回の視察で得た知見を、文京区の今後の政策立案と地域活性化に最大限に活かしていきたい。

あまわりパーク

うるま市との交流で学ぶ平和と歴史

建設委員会 委員長 松平 雄一郎

2024年に本区と友好都市協定を締結した沖縄県うるま市を訪問した。この協定を機に、文京区立中学生の代表者をうるま市へ派遣する平和特派員事業が例年実施されている。本事業は、本区の児童生徒が現地の中学生との交流や様々な史跡の訪問を通じて平和学習を行うものであるが、今回の視察は、私たち議会として、特派員の訪問先を含む史跡や施設を実際に訪れることで、どのような平和学習が行われているのかを知る事ができる貴重な機会となった。



うるま市には、勝連城跡などの琉球王朝時代の史跡や、石川歴史民俗資料館をはじめとする太平洋戦争の戦中戦後の米軍占領下の状況を理解できる施設、さらには闘牛を間近で見ることのできる多目的ドームなど、本区にはない貴重な資源が数多く存在している事を知った。今回の視察を通して、うるま市との交流は、今後、文京区で生活する子どもたちや多くの区民にとって、その特徴ある文化や歴史を学び、視野や考え方を広げる大変貴重な機会となるものと確信する事ができた。今後、さらに交流が深まり、強い連携と絆が築かれることに大きな期待を寄せている。

今回の視察の受け入れにあたり、多大なるご協力をいただいたうるま市議会並びにうるま市役所職員の皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

うるま市との都市交流視察を終えて

文教委員会 委員長 上田 ゆきこ

うるま市視察では、文化財の保存と活用、人材育成、環境政策、平和教育、議会運営に至るまで、多分野にわたる示唆に富んだ学びがありました。

あまわりパーク・勝連城跡では、現代版組踊「肝高の阿麻和利」を活用した体験型展示が印象的でした。単なる史跡見学にとどまらず、子どもたちの活躍の場を創出しながら、人材育成にも寄与している点が特徴的です。また、阿麻和利を逆臣と英雄の両面から解説する展示は、歴史が立場によって異なる見方を持つことを学ぶ教材としても意義深いものでした。さらに、うるま市の文化財保全係には常勤学芸員



4 名がバランスの取れた年齢構成で配置され、専門性の継承と安定的な運営体制が確保されていました。学芸員の年齢構成や人材確保に課題を抱える文京区にとって参考となります。



海の文化資料館の企画展「もずく」では、うるま市が日本初となるモズクを活用したブルーカーボンクレジット認証を取得し、環境保全と漁業振興を両立させる地域循環型モデルとして、官民連携のもと事業が展開されていることを知りました。

海の文化資料館

石川歴史民俗資料館では、宮森小学校ジェット機墜落事故の体験者から直接お話を伺いました。戦後の沖縄における最大規模の米軍機事故であったにもかかわらず、県外での報道の少なさや補償の不十分さなど、当時の厳しい現実に触れました。基地と隣り合わせの生活から逃れることのできない状況には、言葉にしがたい重さを感じました。文京区の中学生平和特派員事業においても、子どもたちに平和の大切さを感じてもらう意義を改めて認識しました。

うるま市議会では、議会 BCP として、災害時に議会が情報を集約し、災対本部へ伝達する仕組みが整えられていました。災害対応の初動期において、情報の集中や錯綜による災対本部への過度の負担を防ぎ、行政機能を維持する観点から極めて重要です。

友好都市として交流を続けているうるま市から得た知見を今後の文京区政に生かしていきたいと思います。



石川歴史民俗資料館

うるま市との都市間交流に参加して

自治制度・地域振興調査特別委員会 委員長 板倉 美千代

うるま市へは、一昨年文教委員会で平和学習の取組を学んだことに続き、今回の都市間交流の参加で再び平和学習の機会を得ることができ、改めて“生の声”もお聴きできたことに感謝いたします。

自衛隊の訓練施設建設が予定された石川地区は、1959年宮森小学校に米軍ジェット機が墜落し子どもたちや住民が犠牲となった地域でした。地元は報道で知り、住民無視と、「住みやすい閑静な住宅地に不安」と多数の声が上がり、保革、地域を超え短期間に反対の声が広がり、これを受けて議会が全会一致で反対の意見書を提出し、断念させた闘いがありました。悲惨な歴史の教訓があったことで、住民が素早く立ち上がったことをお聞きし、新聞報道だけでは知りえない貴重な体験をさせていただきました。



一方で、沖縄は観光振興に力を入れ、うるま市の「感動産業特区」は伝統を守り文化を大切にしながら新しいことに挑戦する人々のエネルギーがあふれるまち、唯一無二のまちとしての取り組みを若い方々からお聞きし、“がんばれ”という思いでした。

訪問後に報道されて思い起こしたことを反省しているのですが、うるま市で10年前に当時20歳の女性が米軍属の男に暴行され殺害される事件がありました。沖縄では、こうした米軍・軍属による事件が後を絶たず、基地あるがゆえに安心して暮らせないという忸怩たる思いです。

都市間交流(うるま市)の視察に参加して

災害対策調査特別委員会

委員長 宮本 伸一

「文化資源を核とした観光・産業振興と交流施策の具体化」として、フードコート「うるまテラス」、うるま市民食堂、勝連城跡、あまわりパーク展示室、浜比嘉島、海中道路あやはし館を視察した。各所、短時間であったが、うるま市さんからの強い提案があつたのことで沢山の視察ポイントとなっていた。それぞれの特徴を生かして観光資源・教育資源として意義のあるものとなっている。文京区立中学校の生徒代表が、これらの視察ができ、体験させていただいていることは、人格形



成・広い教養の取得の意味からも大変に有意義と実感した。これからもより多くの子どもたちに触れてもらいたいので、しっかり推進したい。

うるま市・市議会議員との意見交換会では、地元を愛する若い方々が多くいることがよく分かり、市としても力を入れているとのこと。それらは将来を見据えての、うるま市にとっての大きな財産であり、文京区としても学ぶべきポイントと思った。議員による率直な意見交換は、理事者との質疑と違い、各議員において、現状の考え方も違い、目指す方向も様々あり、議論が新鮮だった。災害対策については、強風による被害について、地元住民の共助自助の取り組みの強さを学んだ。文京区での災害対策の取組に生かしたい。

石川歴史民族資料館を視察し、「平和教育の充実に資する知見」を得た。

事前にホームページ等で予習をしていたが、実際に足を運び、歴史資料を目の当たりにし、説明をお伺いすることで、衝撃的な平和教育の学びを得ることができた。石川の地においては、戦争の悲惨さのみならず、戦後のアメリカによる支配下において、アメリカによる社会体制構築、その後の基地のあるまち、米軍による事故、など大変に難しい課題を抱えながら生き抜いて来られたことを学んだ。未来の平和のためにも、より多くの子どもたち、世界の人々に見てもらいたいと実感した。文京区の子ども達による現地訪問を推進したい。

「感動」＝学びを起動する都市の物語

子ども・子育て支援調査特別委員会 委員長 兼

自由民主党文京区議会 幹事長

田中 としかね

うるま市が掲げる「感動産業特区」は、地域資源を「感動」という軸で束ね、教育・文化・観光を横断する「宣言型まちづくり」に他ならない。その象徴である「肝高の阿麻和利」は、単なる舞台芸術にとどまらず、琉球が東アジア海域の中継貿易によって栄えた歴史を体現する「生きた教材」としても位置付けられるだろう。ここには「感動によって学びが起動する構造」が存在していると思われる。

例えば、勝連城跡を起点に、阿麻和利の時代における交易ネットワークや城と港の関係を読み解くフィールドワークを実施し、「なぜこの地が海を制したのか」という問いを軸に探究を深める。同時に、「肝高の阿麻和利」を鑑賞・分析し、歴史が舞台表現としてどのように再構成されているのかを学ぶことで、史実と解釈の関係を立体的に理解させる。さらに、海中道路周辺での自然観察を組み合わせ、「海を越える」という条件が交易や文化形



成に与えた影響を実感的に捉える体験へと展開する。「感動」というのは、一過性の情動ではなく、思考を駆動し、問いを生み、次の学びへと接続する起点となるものである。そしてそれは、単なる「知識」を超えた「理解」へと至るであろう。制度ではなく「感動」によって起動する学び。これからの自治体間連携に求められる本質を示しているようにも思う。

うるま市との都市交流視察を終えて

日本共産党文京区議会議員団 幹事長 金子 てるよし

文京区議会は区が友好都市協定を結び、戦争の悲惨さや平和の尊さを学ぶ平和教育の一環として毎年、区内中学生を平和特派員として受入れている沖縄・うるま市を20・21日に訪問しました。

市議会との意見交換会で沖縄の農業の特性について尋ね、台風で一夜にして作物が壊滅する厳しい現実を伺うと同時に、うるま市議会が2024年に国へ提出した「うるま市石川地域における自衛隊訓練場整備計画の断念を求める意見書」が「市民の深刻な不安」を「真剣に受け止め」提出された経過を伺いたいと質問しました。当時、国が自衛隊訓練施設の建設を報道発表した元ゴルフ場は住宅地に隣接し、1959年に墜落した米軍戦闘機が撥ね上がり、付近の家を引きずりながら150m先の宮森小学校の底に激突し、エンジンの一部が教室に突っ込み、ジェット燃料がまき散らされ炎上、児童や住民ら18人の尊い命を奪い、二百人余の重軽傷者を出した現場から1kmと至近で、その記憶が継承される中、住民・企業等の声を受け市議会が党派を超え意見書を提出し、訓練場整備断念に至った経過が複数の市議から語られました。沖縄返還時に二十歳だった市議は「沖縄が歩んできた歴史を直視して欲しい、復帰して良かったのか」との複雑な思いをお聞きし、翌日は墜落50年目から資料収集・継承に取り組むNPO法人 石川・宮森630会の方(事故当時、宮森小1年)や市教育委員会から、石川歴史民俗資料館等で説明を受けました。



加えて、平和特派員の中学生が立ち寄る世界遺産・勝連城跡等、文化資源の視察先では市教委文化財課から説明を受けました。うるま市教育委員会に文化財課を約20人体制で設け、文化財ごとのパンフレットを発行し、住民や来訪者の学習条件確保に資する取組を行っており、文京区でも学ぶ必要があると感じました。

豊かさと厳しさが際立つうるま市の自然と文化・平和の尊さが共有される交流でした。今後、課題となる住民間の交流を進める上で、これら互いの自治体の特性に関する学習に力点を置き、相互理解を深められるかが課題になっていると思います。

うるま市との都市交流視察を終えて

公明党文京区議団 幹事長 田中 香澄

4月20日、21日は、うるま市へ友好都市間交流の一環で訪問をさせていただいた。両日ともにカラッとした天候で青空に恵まれた。到着後すぐに、あまわりパーク、シビック大ホールで公演された「肝高の阿麻和利」を思い出しながら勝連城跡へ。本区の中学生も平和学習で訪れた城跡の頂を目指すと、そこには、あまりにも美しいエメラルドの海と空が待っていた。様々な歴史観はあるものの、農耕や貿易で街を豊かにした地域の英雄、「肝高(きむたか＝心根が高い)な英雄」として語り継がんとするうるま市の思いを改めて認識した。



また、うるま市議会の皆様と感動産業特区の取組について意見交換を行なった。海や世界遺産、農水産物など溢れる魅力はそれだけで輝いていたが、「感動」という軸を意識した PR 力やブランディング力の高さには学ぶべき点が多々あった。

最後に訪れた石川歴史民族資料館では、沖縄戦の戦後に焦点を当てた、非常に貴重な展示物と話を伺えた。民間収容所の設置、戦後の暮らしがわかる生活用具。互いに傷ついた心を癒すその術は、文化部の設置で、平和演芸場と呼ばれた舞台には、前を向いて前進する逞しい石川の人々の姿があり、感動で一杯になった。これからもうるま市に学び、うるま市と共に実りある交流を続けていきたい。

うるま市との都市交流視察を終えて

政策チーム AGORA 幹事長 浅田 保雄

平和教育として文京区の子どもたちを受け入れていただき、感謝いたします。

訪問したうるま市立石川歴史民俗資料館では、沖縄戦早期に米軍が設営した民間収容所の実態を克明に伝えていました。戦後の米軍統治下、石川は民間人収容所であり暫定行政の中心地として、住民自治再建の礎を築いたのです。

1945年4月3日、米軍が住民収容を開始すると、戦前人口2千人足らずの石川に約3万人が集められました。この収容所は沖縄各地の民間人収容所の中でも中心的役割を担い、戦後行政の出発点となりました。住民の生活は米軍管理下に置かれ自治は制限されたものの、戦後復興の基盤が築か



れました。同年5月、石川学園が開校し青空教室ながら教育が再開。8月には米軍政府が沖縄諮詢会を発足させ、住民意見を行政に反映させる仕組みを整えました。これらは後の沖縄民政府創設へと繋がる、重要な自治の出発点でした。

資料館の展示は、住宅、米軍払い下げ品、芸能活動、生活用具などを通し、住民が限られた資源の中で生活を立て直した様子を示していました。厳しい米軍統治下でも、住民が主体的に生活と文化を再建し、石川を拠点に教育・文化・行政の復興が進み、住民自治の基盤が形成されたことを学びました。

1959年6月30日午前10時20分、嘉手納基地を飛び立った F100D ジェット戦闘機が校内に墜落。児童11名死亡、職員1名・児童165名負傷、複数教室が全焼・破壊され、付近住民にも死傷者が出る大惨事となりました。この悲劇が、米軍基地での演習差し止めや基地撤去を求める住民運動の基礎を確立しました。

こうした歴史の事実を学ぶ平和教育を、更に継続していきたいと感じました。

うるま市との都市交流視察を終えて

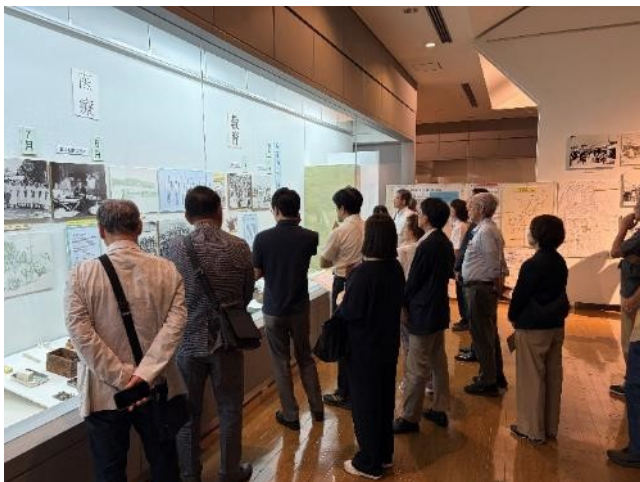
区民が主役の会 幹事長 依田 翼

沖縄県うるま市の視察では、市役所・市議団からは観光や農業の話を中心に伺った。もちろん今あるありのままのうるまの魅力を对外発信していくことは非常に重要だと思う。ただ個人的には約20年前にうるま市ができる前の2市2町のうちの1市である旧石川市の成り立ちについての展示に非常に感銘を受けた。

お邪魔させてもらった石川歴史民俗資料館の展示や、案内くださった市議らの解説によると、石川市は沖縄戦で侵攻してきた米軍によって作られた人工的な集落だったという。1945年に米軍が沖縄県に上陸し、占領地を広げる中で、追い出した住民を石川地区に「民間収容所」として強制的に移住させた。人口密度が非常に高い難民キャンプのような状況から政治や報道、文化が生まれ、沖縄の戦後復興の礎を築いた。そしてそのまま市として独立し、合併してうるま市になるまで存続したという。私が無知なだけかもしれないが、このような話は全く初耳であった。



▼ 石川歴史民俗資料館 ▶



現在の石川市の市街地は当時を思わせるものは少ないようだが、沖縄の戦中戦後の歴史を学ぶのにとっても良い教材であるし、文京区とうるま市の相互交流の柱の1つである平和教育を学ぶ場としてふさわしい場であると感じた。なかなか現地に行かないと分からないことが多かったので、訪問の機会を得られたのは大変良かった。



勝連城跡にて